

# 告布

911.56-N93-27

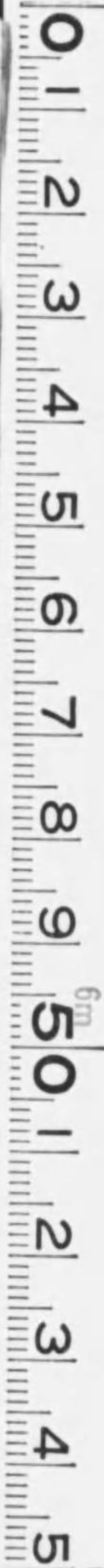


1200500756795

911.56

N93

②

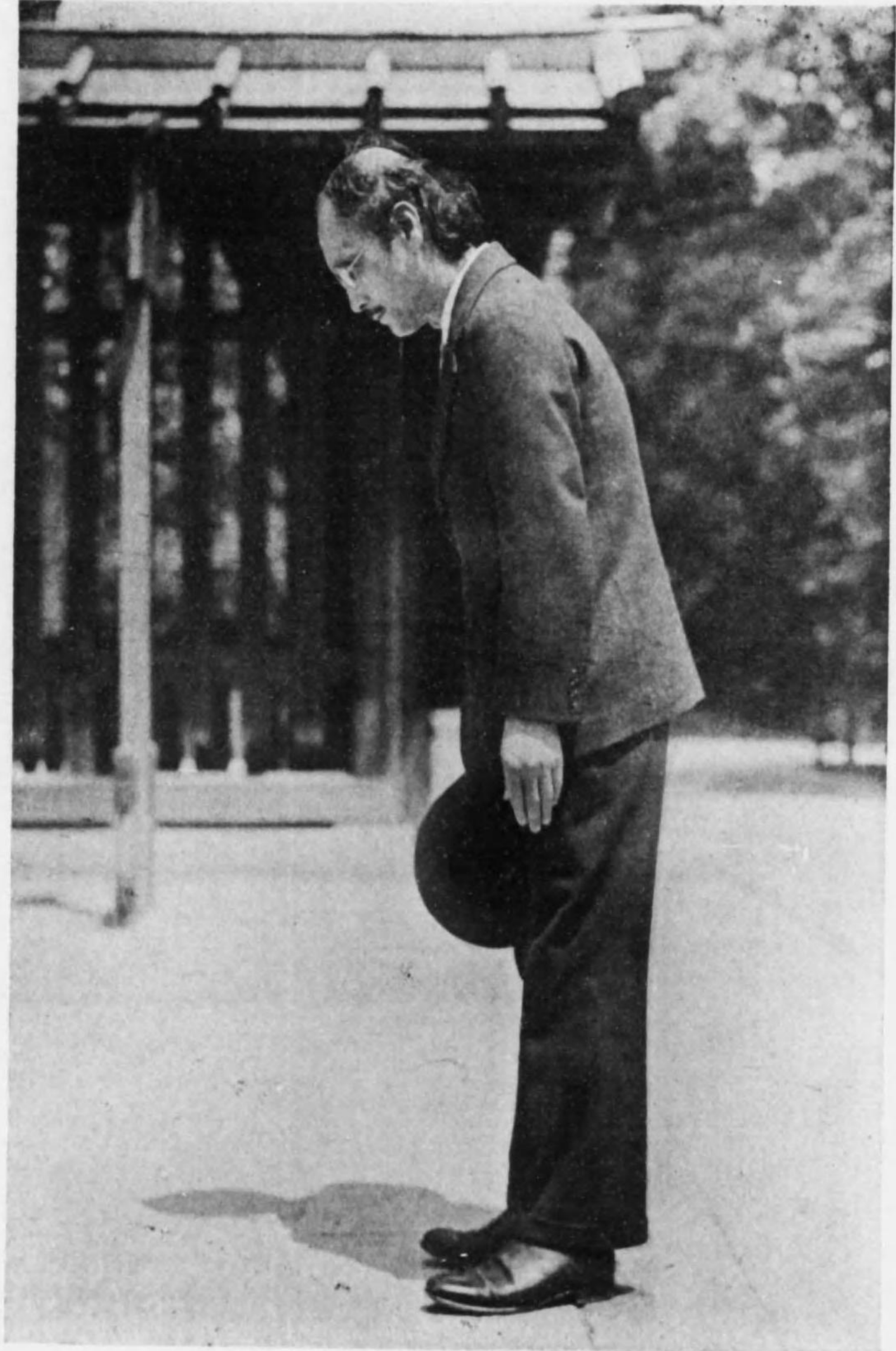


# 始



268

111  
M 11-2



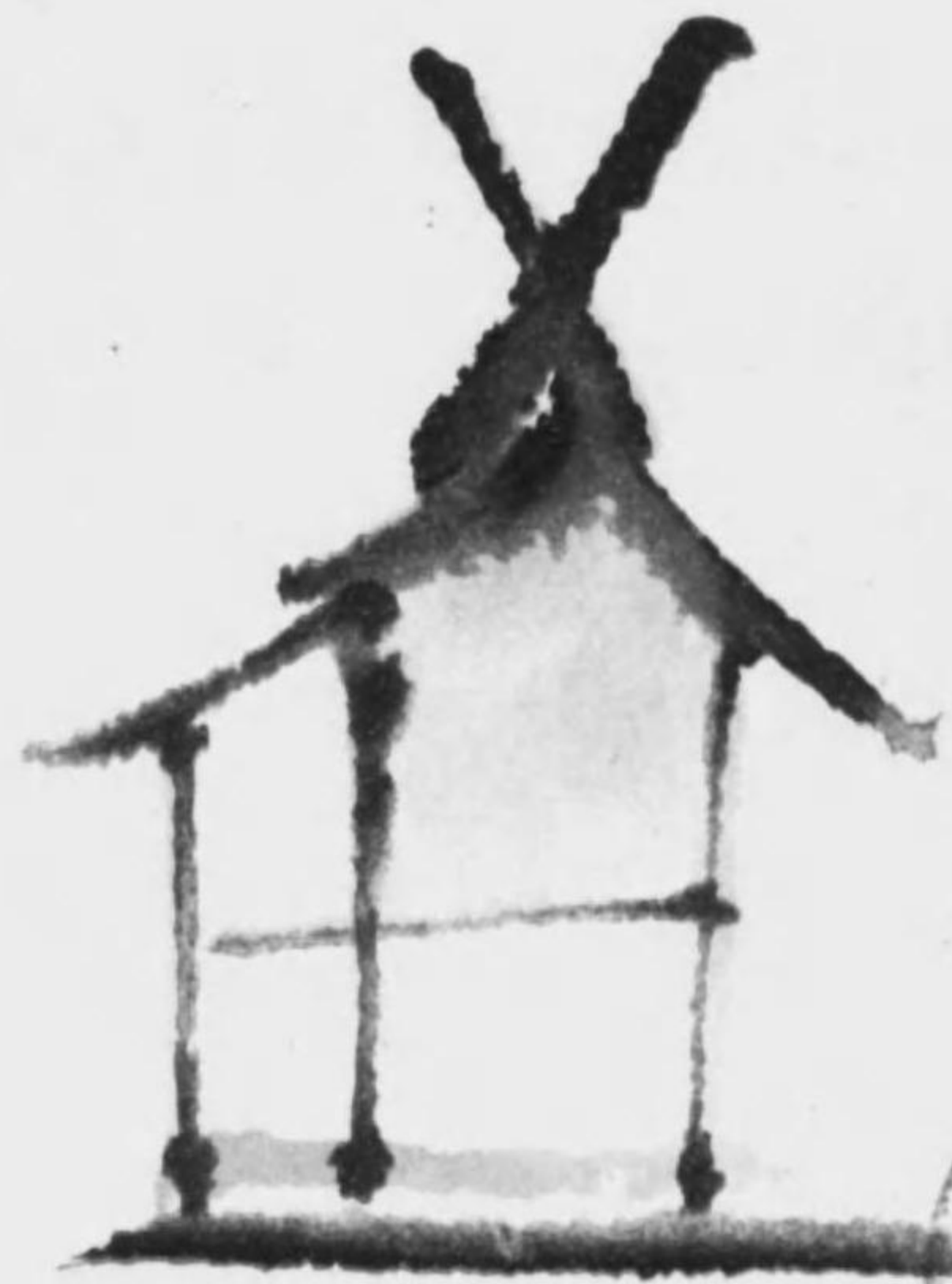
明治神宮に額くづ野口米次郎

# 宣戰布告

911.56  
N93-2

(7)

野口米次郎



道統社



2.11.11  
5.11.11

葉巻7-1094

1007  
82

装  
幀  
川  
端  
龍  
子



## 自序

野口米次郎

人生は永劫の宣戦布告なり。

聞くならくマホメットは、一方の手に劍を他の手に薔薇一枝を提げしとかや。今わが日本は一億一心、決死隊の意氣と熱とに依り、現實の荆棘を打破制服し、以て理想の完成に邁進せんとする。これ天壤無窮、萬世一系の神勅を奉戴し、日本將來の繁榮を全亞細亞民族

に分たんとするもの、心に詩歌なく自然と人情の美と正義とを理解せざる徒輩の能くする所にあらず。

戦争と平和は二にして一なり。われ一生を詩歌に捧げ來れど、今日國家の重大時局に際會して戦争を支持謳歌する所以自ら明かなり。生を日本に得て壯嚴無比の今日をまのあたりに見る嬉しさ、涙なくして感謝すること能はず。

昭和十七年一月五日

目次

自序  
荒行者  
宣戦布告  
一億の決死隊  
破竹の突撃  
語を同胞に寄す  
時事述懐  
全亞細亞民族に叫ぶ  
眞珠灣の炸裂

目次

二 四 七 〇 三 六 九 三 五

還らぬ荒鷺  
神の膺懲  
落ちゆく血達磨  
神風  
召集令  
英靈に捧ぐる歌  
國に誓ふ  
日本創造  
東亞の暁  
妹より出征の兄に送る手紙  
幻  
龍に題す

元 三 七 四 四 四 四 四 四 四 四 四

昭和十四年元旦の言葉  
昭和十六年元旦の言葉  
二千六百二年元旦の言葉  
最後まで生きる  
汪兆銘に與ふ  
翼賛の詩  
覺悟  
三國同盟成る  
米國人に與ふ  
暴風雨  
人生甦る  
倫敦炎上

七 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七



飛躍	三四
海に呼ばれて	三六
南進國是	三六
南へ	三六
興亞行進曲	三九
興亞奉公の歌	三九
紫色旗の下に	四〇
壽く言葉	四〇
國土禮讚の歌	四一
禮讚	四一
一億一心	四二
年頭伊勢の大神に額づき申す	四三

四月の頌	一七
美の新形態	一八
棒高飛	一九
藤豆	二〇
音	二一
畝火山の鶯	二二
女菩薩	二三
海	二四
青いお椀	二五
壁	二六
跋にかへて	二七

目次

目次了



宣戰布告

荒行者



海邊に襖被ひする荒行者、  
頭髮梳らず逆立ち、

手を擴げ、足をふん張る姿勢に、

われ交靈奉贊の行を見る……

松は冷水に穢れを落とすし、

朝風に息吹を合せて、

振魂し、

雄叫びする、

これ物心一如の示訓、

これ人生開顯の表象、

これ祖孫一心の構へ！

ああ、わが日の本は松の國、

幹の龜裂に風雪調伏を印し、

不變の緑に永劫の色あり、

われ榮えて衰へるを知らず、

われ進んで退くを知らず。

四邊の海はわれを稱へて聲朗朗たり、  
洋上百千の島末廣がりに散らばり、  
われはこの要要に立つ荒行者……  
海邊襖被ひ雄雄しき松に、  
誰か神人一如の姿を見ざらんや。

註、昭和十七年元旦の作讀賣紙上發表、J O A Kより丸山定夫氏  
朗讀放送。

## 宣 戰 布 告

昭和十六年十二月八日

われ聲を大にして殉國の秋を叫ぶ……  
ああ、來る可きもの遂に來れり。  
もの共蹶起せよ、劍を握れ、  
これ勝たざる可からずの戰なり、  
東亞の死活この一舉にかかれり。  
運命に服従せずして天業の成るなく、

犠牲に身を清めずして神に答へること能はじ。  
汝徒に奢れるもの、敗北を満喫せよ、  
汝徒に人を侮るもの、死の前に膝まづけ。  
われ等頭上に萬世一系の聖天子を戴き、  
民億兆の血潮、百萬武勇の兵を通じて溢れたり、  
ああ、いづこにかかる偉觀あらんや、  
ああ、いづこの國かわれ等を屠り得んや。  
勝敗の決既に定まれり……  
われ等往く、ただ前進あるのみ、  
進め！ 進め！

註、本詩は最初都新聞で發表され、つづいてJ O A Kより國民  
詩として放送さる。更にまた丸山定夫氏によりコロムビア  
レコードに吹込まれたり。

一冊の六五編

宣戰布告

## 一億の決死隊

一、國難ここに、天暗し、  
往く一億の、決死隊、  
國に捧げし、熱血の、  
杯あげて、命を待つ、  
誓やかたし、護國軍、  
己を捨てて、身は輕し。

二、敵性國家、蹴散らして、  
上る征途の、決死隊、  
ああ殉國の、秋は今、  
民一億の、義に答へ、  
死中に求む、活の道、  
誠を追ふて、恐れなし。

三、ああ往け往くよ、一億の、  
使命に踊る、決死隊、

包圍陣營、撃滅の、  
覇業は招く、鐵の腕、  
炎と燃えて、天に書く、  
見よや東亞の、新歴史。

註、本歌は帝國蓄音機會社の委囑により作れるもの。

### 破竹の突撃

- 一、高鳴る胸よ、氣は躍る、  
勝たねばならぬ、きつと勝つ、  
ああ殉國の、重大時、  
勇氣だ智恵だ、忍耐だ、
- 二、沸る血潮に、海を塗る、  
敵性國家、波に消ゆ。

二、もの見せ呉れん、敵來れ、

死ぬを覺悟に、挑み來よ、

墓場築いて、待ち申す、

日本男子の、腕力、

包圍陣營、手をあげて、

わが天業に、膝まづく。

三、民億兆の、共榮圈、

破らば來り、破りみよ、

われ等は守る、鐵壁陣、

犠牲に生きよ、大使命、

ああ回天の、戦ひだ、

破竹の突撃、受けてみよ。

註、本歌詞は群讀詩としてJ O A Kより放送されたもの。



## 語を同胞に寄す

祖先を冒瀆するもの、米國人よ、  
卿等は創造の苦みに國を築きしにあらずや。  
故國の頑迷を蹴つて獨立を叫びし時、  
卿等建設の理想天に冲せしにあらずや。  
卿等は新しき經綸に身を洗ひ、  
世界史に革命の頁を書きしにあらずや。

富貴に陥ひ、黄白に漚するもの、  
米國人よ、卿等今は自己保全に汲汲たり、  
嘗て神意の金字塔を全うせしもの、  
今や東亞の爛れし癩病患者を友として、  
喫煙室の猥談に時を消費するのみ。  
われ等使命を帯び天業につけるもの、  
何の求むるあつて耳を彼等の策謀に傾け、  
徒に滑稽役者となつて正義を輕んぜんとするや。  
われ等貧しく夢をのみ後世に残さんとするもの、  
烽火となつて將來の歴史に生んとするもの、

われ等は力を信じ火の進軍を歌ひ來れり、  
われ等は天に答へて叡智と犠牲を守り來れり、  
今にして勇氣挫け力怯まば、  
何の面目あつて祖神に膝まづかんとするや、  
何の言葉あつて祖神に答へんとするや。  
躊躇する勿れ、逡巡する勿れ、  
最後の榮冠卿等を待つや久し、  
ああ、前進の旗颯颯と靡き、  
警鐘新しくりんりん響くを知らずや。

註、本詩は宣戦布告の数日前に書けるもの、讀賣紙上發表。

### 時事述懐

起つて望む、空のあけぼの、  
眼に見たり、飛びゆく鳥、  
我等これより緊禪一番を學ばざる可からず。  
畏縮は蝸牛の有なり、  
尺蠖は屈すれども、なほ伸るを知る。  
戦場に倒れし勇士、

幻の軍をおし寄せ、

我等の畏縮を責むるを感ぜり。

徒に思案するを止めよ、

机上の企畫を離れ、

大空の道を求めよ、

皇國の進むべき所既に決せるも、

萬歳の聲耳にのみ残り、

論議に日を移し、勇を缺かば、

假令今日非難を逃るる道あるも、

いづこに明日の口を緘する術あらんや。

註、本詩も日・米英戦以前、日支事變收拾の道明かならず國民の  
意氣暗憊たるの時の作。

## 全亞細亞民族に叫ぶ

全亞細亞民族よ、

頭をあげて見よ、神の指揮棒天に煌く……

一齊に興亞大行進を奏てるの時だ、

心一つに八紘の大使命を讃へるの時だ。

われ等民族維新の戦争に起てり、

世界の平和確保を誓ふもの、ただ前進あるを知るのみなり。

われ等力と智慧と想像により、

運命を擔つて全亞新秩序を期するもの、

今や決然として大征途に上れり……

ああ、燦たる共榮無私の天業よ、

無私翼賛の總力戦よ！

われ等は天の意志に従ひ犠牲の金字塔を建て、

以て子孫に百年の繁榮を遺さざる可からず。

日本今や敵を粉碎し皇道の烽火をあぐ、

血もて繋がる全亞細亞民族に叫ぶ……

新しき世紀を産まざる可からず、人生の勇者たらざる可からず。

ああ、われ等こそ心揺がぬ世界の大團結だ、  
われ等に炎と燃ゆる進軍の勇氣あり、  
力だ、熱だ、  
全亞細亞民族よ、  
民族の勝利目ざしてわれ等往く、  
われ等は知る、永劫の壯圖に天答へ給ふを。

註、本詩はJOAKのため朗讀詩として書けるもの。

### 眞珠灣の炸裂

曉の襲撃は暗黒を散らして太陽を呼べり

日本は日支事變を古い歴史の終止符なりとした。  
げに亞細亞は脱皮を待てる苦悶の大蛇……動き始めたが、  
暗黒と無智を振り退ける決意が無かつた、  
日本が與へた人生の酒杯を飲みほさんとしなかつた。  
かくて日本は何處に一層有力な力と美の葡萄酒を求め、

彼等の眼に一層の生氣を與へ、その唇に一層元氣な血を漲らせる道  
を知らなかつた、

そして日本は新らしい歴史の初頁を始めることが出来なかつた。  
然るに霹靂一聲！

眞珠灣に炸裂した襲撃の爆弾は曉の太陽を呼び出した、  
暗黒は忽ちに後退した、

一天正に晴れ渡つた、

亞細亞は始めて兩眼を見開いた、

その唇は日本が與へた復活の酒杯を飲み始めた。

颯颯たる興亞の御旗は朝風に靡きだした、

太平洋の諸島……グアム、ダバオ、ウエーク、ミッドウエー、

皆な頭冠に附けた青玉赤玉の美を放散し始めた、

大洋の波に流れる創造の光に相答へ相和し始めた、

ああ今始めて古きに替る新歴史の頁が開始された……

前記の諸島悉くその一句となり、一章となつて新世紀を稱へ始めた。

今や香港の攻略始まる、

マニラの陥落、シンガポールの滅亡もやがて續いて來らん……

破壊だ、破壊だ、古きものを破壊し盡し、

我等はこれ等を血祭にして戦争の神様に捧げるであらう、

戦争の神様は嘉し給ふ……破壊なくして新建設がない、  
新しい世紀開始の戦争だ！

平和の神様よ、しばしの辛抱だ、破壊の完成を我等に許し給へ！

註、本詩は日日新聞紙上で発表され、J O A Kでは國民詩として朗讀放送した。

### 還らぬ荒鷲

布哇襲撃の飛行勇士を弔ふ

ああ憤怒破れたり、嵐を作る日本魂！  
篠突く爆弾の雨、炸裂する雷、  
紅蓮の炎水上より上る、劫火の空に飛ぶ猛鳥の阿修羅、  
悪魔か、否な、救世の靈鳥なり！  
撲滅一過、

還らぬ荒鷲

銀翼朝日に襖被ひして、見よ、神意示現の姿あり！  
空中に凱歌の聲あれども、

機〇〇〇遂に無し、ああ無念！

我等見る、敵の戦艦あまた不浄の波に没し、

残骸を恥辱に曝らせり、

聲ありて挽歌を誦するなく、

香を焚き花を捧げてその最後を悲むなし。

憐れなるもの、汝等懶惰を貪り、

虚飾を満喫して天を恐れざりき、

理ある哉、神の膺懲汝等を抹殺するや、  
今や汝等の櫓に旗なく、  
ただ甲板に敗戦の影動くのみ。

ああ、暗夜波を分け數千海里進みし勇士、

歴史は卿等の名譽を千載に奏てる……

卿等は白紙の誓を神に捧げ、命令一下、

活を求めて死地に乗り入りたり、

卿等こそ身を殺して國を救ひたり。

我等億兆、心一つに卿等の犠牲を謝す、



卿等は我等に神護の再約を與へたり。  
我等かく信ず、卿等の偉業により、  
勇は朝に百城を屠り夕に千艦を破る、  
國土安泰、富士山の如く盤石たるを。  
ああ悲む勿れ、卿等の姿地上に無けれど、  
耳に聞く轟く飛行機天を走り、  
幻の空軍故國を守る、  
隊伍堂堂、一絲の亂るるなし、  
ああ壯なる哉、偉なる哉！

### 神の膺懲

天へ昇らんとした花火は地に落ちる

氣驕つて虚飾に逸るもの、精進を忘れ、言語を恫喝の賤しきに墮  
落せしめしもの、正直と自由を野師の看板とせるもの、政治を職業  
化して國を誤りしもの、弱小民族の搾取を特權と心得しもの、富の  
暴戾を謳歌せるもの、反省を無視して謙讓を知らざるもの、ああ、  
誇大妄想を亂舞せるもの、彼は米國人！

彼は何の理由あつて自らを神の高きに上らせんごしたか、徒に鷹の鞭を振つて世界の凡てを支配せんごしたか。

ああ、彼はどうして突如起つた飛行機の炸裂が、國運忽ちに逆轉させるに至るを豫想したであらう。どうして眞珠灣上朝飯前の出來事が、國家長い間の計畫を無にして仕舞ふことを豫想したであらう。どうして日本人がかくも智慧深く、かくも忍耐強く、かくも勇敢なるを豫想したであらう！

彼は見た……朝日が海を火にする壯觀でない、自分の戦艦を自ら火葬にする夕日の光景であつた。

彼は聞いた……それは日本の海鷲が空を往く大行進、亡びる戦艦

を弔ふ葬式の合唱であつた。

愚かなもの、彼は知識の探求を忘れ、他國に如何なる神秘があるかを知らうごしなかつた、彼は自己満足の金財布であつた。

彼は始めて神の鷹の痛いことを知つた。

峻嚴にして假借なきもの、その名は戦争……戦争の決する優劣に異議の立てようがない。二千六百年蓄積し來れるわが日本の精神力に及向つては、如何なる國も鎧袖一觸而已だ。

語有り、『驕れるもの久しからず、春の夜の夢の如し』……

天へ昇らんごした花火は地に落ちる、

米國人は虚榮の羽を擴げる孔雀だ、

心弱きが故に恫喝を吠える犬だ。

註、本散文詩はJ O A Kのため朗讀詩として書けるもの。

落ちゆく血達磨

爆弾の炸裂、

死を吠える砲火、

ああ、斷末魔の血達磨、

罪の城廓落ちゆく……

武士の情だ、勇敢に悲壯に、その最後を迎へしめよ、  
誤れる百年の搾取、奪へる凡てを返し、

落ちゆく血達磨

暴戾の記念塔、今悔悟の血を吐き、  
自らを火葬して消えてゆく。

我等九龍の山上に立つ、

悲しき死の挽歌を奏てるにあらず、

我等の耳に訴へるは新しき生命の歌、

我等の眼に映ずるは血もて洗へる死の光榮、

ああ見よ、灰燼より不死鳥顯はれ來る、

歌へ皆共、罪もて贖へる生の歡喜！

我等今山上に立つ、落ちゆく血達磨を送るにあらず、

新しき世界の不死鳥を迎へるためなり。

註、本詩は香港陷落を歌つたもの讀賣所載。

## 神風

傳へ聞く日本武尊御東征の物語、

駿河の賊神を知らず策多し、

倭辨尊を狩に誘き、草を焼いて、

一舉に英雄を屠らんごせり。

尊機を見る明、斷や敏、

鞘を離れし尊の寶刀雲を呼べり風を呼べり、

尊焼き給ふ草の猛火逆に煽り擴がり、

笑止なる哉、賊共遂に鑿しにされたり。

ああ一網打盡の奇瑞昔話にあらず、

われ等今日のあたりに見る、A B C Dの包圍團、

皆な吹きまくる神風の膺懲に消えて行く。

布哇の襲撃、香港の陥落、

これ神靈加護の奇瑞にあらずして何んぞや。

げに我國は國難毎に神祕を見る、

元軍十萬の殲滅は、いふも更なり、

近くは日清日露の戦役、みな神風に加護ならざるなし。

神われ等に降臨し給ふ、ああ、あやに畏し、  
若しわれ等世界を修理して神意に答へ得ずんば、  
天罰のほごこそ恐しけれ、ああ恐しけれ！

## 召 集 令

召集令が伴に下つた……

粗末な紙の一片、卓上に燃える赤の炎！

書齋の夜は嚴かに沈黙は深まりゆく、

私は聲を聞く、

「國のお召しだ、伴の體を捧げよ、伴の魂を捧げよ！」

私は外國に聖戦を説いた、

東亞の新建設を説いた、  
どんな犠牲も辞しないと説いた、  
最後の肋骨一つも、最後の血一滴もいらないと説いた。  
人は私の言葉に文學を見た、  
雄辯の連鎖を見た。  
だが、今、伴は私を恥辱から救つて呉れた、  
彼は私の文に、魂で體で、  
連帯責任の判をべたつと捺した。  
私が國に伴を捧げなかつたならば、  
私の言葉は、無責任の一札になつたかも知れない。

伴よ、私は親としての感謝を受けよ、  
お前の生きた保證は、  
私を文學の恥辱から救つて呉れた。  
私の文は、これで、血となつて沸り、  
肋骨の壁となつて國を守るであらう。  
伴よ、往け、往け、往け！

註、本詩は昭和十三年十二月下旬の作。

英靈に捧ぐる歌

一、勝つて歸れど、委なし、

わが友なれど、國つ神、

たれか唄はん、死の讃歌、

たたへよ生の、凱旋歌。

二、世を改める、人柱、

げに回天の、霸業心、

死もて示せる、國つ魂、

うけよ感謝の、わが涙。

三、歸れる影の、軍人、

轟く戦車、地を走る、

天に勝利の、喇叭鳴る、

あまほろしの、護國陣、

國土全たし、永劫に揺がじ、

國土全たし、永劫に揺がじ。



註、本歌は昭和十五年慶應大學大講堂に於て催された日支事變  
戦没學生勇士追悼會にて合唱されたるもの。

### 國に誓ふ

古い古事記の物語に、日本武尊がお隠れになつた時、大きな白知  
鳥となり給ふて、大空高く飛び大海を越えられたとあります。私は  
今回放送局の委嘱を受け、歌謡曲一篇を作るに當つて、思ひをこの  
ことに及ぼし、私共は旺盛な意志と勇敢な行爲の日本人として、是  
非共かくあらねばならないと思つたのであります。茫漠たる人間の  
あら海を下に眺め、さし登る朝日を拜して、自らを神の高い位置に

まで飛躍させねばならない。しかして始めて私共は人生の指さす神祕の道を開拓し、巨人の如くに東亞の廣野に鋤を入れ、以て新しい國土の建設へと進むことが出来るのであります。然し私共は正義と愛を信ずる謙讓な日本人として、天空高く橋かける虹のやうな大きな理想の道を、一步一步心靜かに歩まねばなりません。秀麗な日本の自然は、永劫不死の管絃樂を奏でて居ります。私共も聲をそろへてこれに和しなければなりません。人生の戦争は長く長く續きます。言葉通りに長期戦であります。死後の墓標の如きは、富士山にまかして置いてよろしい……富士山は自分の墓場だと思へばいい。日本人といふ名譽のために、生命を捨ててこそ本當の人間であると思ひます。

ます。

一、われら空ゆく白知鳥、  
荒るる浪路を下に見て、  
登る朝日に迎へられ、  
雲間にもとむ神の顔。

二、親の教へし正義心、  
愛の光に身を清め、  
新しき世に誓ひ立て、

五、彩色どる虹をふむ。

三、ああ、山高く河長し、

天地無窮の姿あり、

榮えをたたふ聲は一つ、

正義の薫り愛の花、

護り育てん國つ魂、

護り誓はん國つ神。

四、たて同胞よ、言葉あり、

ゆるがぬ富士に墓場をゆだね、

永遠の譽に生命をかへよ。

ゆるがぬ富士に墓場をゆだね、

永遠の譽に生命をかへよ。

註、本歌詞はJ O A Kの委囑によつて作られ、國民精神作興歌として廣く放送さる。作曲家は信時潔氏。

## 日本創造

かしこくも神祖天照大神が、皇孫瓊杵尊をお降しになり、國主たらしめ給ふた時、かう宣ふて居ります、『豊葦原の千五百秋の瑞穂國は、これ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就きて治らせ、天つ日嗣の隆えまさんこと、天壤と窮りなかるべし。』萬世一系、天壤無窮の皇運ここに始まり、爾來春風秋雨、三千有餘年、日月星辰の保護あまねく、山川草木互に結び合ひ、わが國土は榮えを

唄ふ風に包まれ來つて居ります。

世界に國の數は多いのでありますが、以前あつても今は夢のやうに消えて仕舞つた國もあり、また昔は燦然たる文化の花が咲いたが、今は衰亡に近いやうな國もあります。然るにわが日本だけは、天照大神の仰せられたやうに、天壤と窮りなく榮えて、その潑刺たる大精神は時を重ねて、ますます光彩陸離たることは、天下の偉觀でなくて何でありませう。實にわが國は未だ曾て、人道の破壊といつたやうな歴史を残したことがなく、人民はみな生きるの歡喜を天空に響かせ、洋洋たる周圍の金波銀波、海は拍子をそろへて國土禮讚の曲を踊つて居ります。そして私共はつましやかに名譽の道を一筋

に守つて来て居ります。私はこのことを考へる時、心に浮ぶ所は古い物語が傳へてゐる天地創成の記事であります。

天照大神の親神であらせ給ふた伊邪那岐伊邪那美の二柱が、茫漠たる暗夜が流れて、天地がまだ渾沌たる無形の有様であつた時、天の浮橋に立ち給ふたのであります。そしてお手にお持ちになつた玉矛で、眞暗な下の方をかき廻はし給ふと、二神の耳にものが形成する場合の動きが聞えて來、玉矛のさきから落ちた海水が固つて出來たのが、わが大八島の島島であつたのであります。若し人がこれをして幼稚な原始人の想像に過ぎないとしたならば、それはその重大な意義を知らないからであります。わが國は伊邪那岐伊邪那美の二

神が、子孫のために創成された國で、二神の無から有を生みだし、豫想を實在化するといふ偉大な創造の力を説いたものであります。大和民族は既に出來上つてゐる國を拾つて、それに住居を定めたのでなく、自分達だけに作られた國を、永劫の家としたものであります。さればこそわが國は、未だ曾て他の侵略を受けたことがなく、嚴然として太古からの獨立を保ち、國なければ一人の日本人なしの愛國心に燃えてゐる理由、蓋し故あるかなであります。

更に私は富士の靈峰を、遠い親神の生み出し給ふた最も偉大な自然現象として仰ぎ奉るのであります。若し私共がこの精神的金字塔を持たないならば、何處に私共は高き理想へと登る階段を求め得ん

やであります。私共日本人は、この靈峰を國の守護塔と褒め、時と空間を超絶する光りの城廓として稱へ、現在に對する努力奮闘、將來に對する希望への表象としなければならぬのであります。ああ慈愛と威嚴とを湛へる優美な姿よ、そこに私共は祖神達の尊い言葉を聞き、頭を垂れて廣大無邊なる神徳にひれ伏さねばならないのであります。天空高く雲を破り、低くへりくだつてその影を渺茫幾千里の海の下に没してゐる富士山の姿こそ、私共日本人の謙讓な徳と千萬人と雖もわれ往かんの勇氣とを、兼ね代表するものでなくて何でありませう。

私は日本の國體を天下無二のものに信じ、その誇るべき特質が、

天皇御即位の大儀に明かであることを書いたことがあります。上御一人を太陽とあがめ奉り、お示しになる法則に服従するその喜びは、何に譬へることが出来ないであります。今上天皇より溯つていづれもの天皇も、紫宸殿の御儀で即位し給ふのであるが、衣冠束帯に十二一重の傳統により、啾唳たる音樂につれて、天地一新の實を誓ひ給ふことを思ふと、私は世界いづこに、かかる優麗な美に即位し給ふ天皇あらんやと思ふのであります。私共の祖先は大地の愛に生きて來た農民でありました。力強い拳と粗い木目の皮膚を持ち、鋤と鎌との間に正直を拾つた生活者でありました。天皇が大嘗祭の御儀に、實りの秋に對し遠つ親神に感謝し給ふことをはるかに眺めて、

私は日本の天皇が劍の勇者として即位し給はないことを、どんなに愉しく思ふか知れないのであります。私共は戦場の勇者である前に、平和の民であり大地の愛人であることを誓ふものであります。然し世は移ろい世紀かはつて、日本の現状は農國から工業國へと變化して行きますが、國を統治し給ふ天皇の御心は太古の昔から今日に至るまで少しも變らないこと、實に尊く實に懐しく思ふのであります。

私は日本の國家が、生生發達の喜びに溢れて國威が他に及ぶ繁榮を思ふたびに、思ひを伊邪那岐尊がお隠れになつた伊邪那美尊を黄泉の國に訪れ給ふた物語に寄せるのであります。男神は女神の體が恐ろしく變化してゐるのを見て逃げてお歸りにならうとし給ふと、

女神は恥づかしめられたと仰せられ、黄泉醜女といふ魔女に命じて男神を追はしめ給ふたのであります。男神は千引きの石を置き女の軍を防ぎ給ふと、『お前の國の人間日に千人殺してやる』と叫びました。すると男神は、『それでは日に千五百人生んで足せる』とお答へになつたのであります。これ即ち生は死に打勝ち、光は闇を征服するといふ意味を説いてゐるのであります。しかしてわが國は、この生生多産の活動的精神によつて、今日見るが如き東亞の大國となり繁榮を極めてゐるのであります。ああわれ等の驚くべき力の所有よ、われ等は生命の燃焼力を放射して、有らゆる妨害を克服して往くのであります。

今日の使命に答へて、私共は亞細亞新建設のため聖戦を進めて居ります。耳にろうろうたる進軍喇叭を聞いて、この建設に邁進し新しき歴史を作り、亞細亞の隣人へわが日本の恵みを與へんとして居ります。この時に當つて、遠く親神が萬物を無から生み出し、想像を實在化し給ふた奇蹟にかへり、私共は聲を高くして、『産めよ作れよ、創造せよ 創造せよ』と叫ぶのであります。時は熟し、東亞の曠野は、太古の昔わが祖神が天の浮橋で見給ふた渾沌たる光景のやうに、今除除として動き始め形を成す状態にあります。ここに於て私共は、『天に光りあらしめよ』と叫ぶのであります。

『われ等茫漠たる深霧に立つ、

されど我等その柱となり、新しき世は作られるであらう、……  
天地創成の始め、深さ、否な、  
深さなき深さに立ちし神神は、  
即ちわれ等にあらざりしか。』

註、本篇は宮城道雄氏外社中の伴奏により、歌謡譜としてJOA  
Kより朗讀放送せるもの。最近本年(十七年)一月二十七日夜  
本篇の第三回朗讀放送行はれたり。



## 東亞の曉

闇の世界は消えた、

疾く起きよ、

朝の風に觸れて、

渾身に力を漲らせ、

人生維新の壯圖にのぼれ。

言葉あり君にいふ、

『東亞の民や幸ひなり、

いかにごいふに、

太陽は最初の恵を卿等に垂るればなり。

今や朝日は暗き雲を破り、

光の戦車を進めんごす。

ああ目覺めよ、起きよ、

曉の喇叭高らかに響く、

香はしき曉の空に、

人生の壯圖へ就け。

起きよ目覺めよ、

新らしき世界は君を待つ。』

わが大和民族は若い黎明の民であります。私共日本人はのぼる朝日を旗印とし、その活力に誓ひ、自らを養ひ育て生長して来たものであります。朝日は暗黒を蹴ちらし、金銀の光りを地上に降らして、私共の生活を壯麗の文字で包むのでありませう。私共はその祝福に酔ひ、感謝の念に沸きたつ時、自然の眞理を體して、假令言葉なしと雖も、私共は悉く詩人であり、永遠の青年として曉の人間であるのであります。私共は心に叫ぶであらう。『われ等使命をもつて生れた、宇宙を貫く自然の法則に順應し、遠つ親の命令を正しく守つて、知識と情熱を人生に漁らねばならない。私共に力強いエナジー

が與へられてゐる、何故にそれが與へられてゐるか、それは私共が天の使命を果さんがためである。若し私共日本人がそれを正義に使ふことを知らず、或は無駄に浪費したならば、それこそ私共が自然に逆ひ不倫の行を敢へてしたに外ならないであらう。ああ、希望の雲が頭中にむくむくと沸き上る。私共はこの雲、いな避けることの出来ない希望に乗つて、日本人本來の使命を果たさねばならない。私共がこの使命を果す時、私共は遠つ親と立派に直接の交渉を持つのであります。私共は遠つ親の價値を高めて、自らの價値も高め、實行の力で遠つ親の偉大を立證しなければならぬ。遠つ親を認證することは、即ち自然の方則に従ふことで、そのために知識と情熱

を盡して、私共は自らの魂を生長させねばならないのであります。』

仰ぎ見る神武の御東征は申すもかしこし、大化の革新、元寇の役、秀吉の雄圖、明治大帝の御維新、近くは今の日支事變、みな曉の靈氣に燃える覇業心の所産ならざるはありません。わが日本の歴史を飾る英雄は、悉く永への青年として東雲の警鐘をつき、生生發達の使命に亂舞した人人であります。朝日は東天を破つて暗黒は退く……ああ何たる驚異よ！私共はこの曉の光景に、天地開闢の燦として輝く雄姿を拜し、東亞の革新の先頭を承らねばならないのであります。ああ澎湃として寄せ來る曉の靈氣よ、われ等日本人のそれに誓つて、一紀元を劃せんとする壯圖よ！私は今東亞の大陸に曉

を迎へて、感激の聲をあげ、遠つ親の神徳に答へ奉らんとするのであります。

私は想像の眼により、今富士の尖峰に挨拶する東雲の太陽は、光の戦車を朝鮮滿洲へと進める光景を見るのであります。嘗ては不毛の地馬賊の巢であつた陰鬱な陸土も、新らしき時代の解放と自由を得て若若しい生命を曉の靈氣に清めんとして居ります。茫漠千里の蒙古北支の平野も瞬間にして朝日の恵みを受け、『目覺めよ起きよ』と歌ふ曉天の朗朗たる進軍譜に應じ、更生維新の歡呼をあげるであります。黄河揚子江の水は、積年の壓迫と暴虐を表象して濁流を漲らしたが、間もなく金波銀波の亂れ飛ぶ美風景に甦るであらう。

聞くならく杜甫といふ唐時代の詩人は、洞庭湖畔の岳陽樓へ登つて『乾坤日夜浮』と歌つて湖上の眺望を禮讚し、翻つて『老病有孤舟』の病軀を悲んで居ります。そして『戎馬開山北』と歌つて國が馬蹄の蹂躪に暴らされた慘狀に涙を流して居ります。然し若し今回の事變の結果、永劫の平和を支那に齎らしたならば、必ずや違つた詩人が違つた詩を後世に残すであらうと思ひます。そして今既に、私は一羽のフキニツク荒涼たる灰燼の廢墟から飛びあがり、岳陽樓の屋根に止つて周囲を見廻はし、清新の一聲高く歌つてゐるのを聞くのであります。

『ああ喜べよ、隣人愛甦れり、

憎惡、恐怖、策略さては彈丸、戰車の軋り、  
退け、退け、それ等を過去たらしめよ。』

註、本篇は前掲『日本創造』の姉妹篇、等しく宮城道雄氏外社中の伴奏により歌謡譜としてJ O A Kより朗讀放送せるもの。  
若干削除された所あり。

## 妹より出征の兄に送る手紙

兄さん、

昭和十四年は、あなたの御入營が間もなく出征となり、私共がいぞ覺えたことのない緊張した感じて過ぎました。また本當に慌しい一年でもありました。お母さんは生來内氣な優しい人ですが、時かつと眼を据えて、「兄さんの御苦勞をお考へなさい、皆が影となつて付き纏ひ、一緒に聖戦に従事しなくては」と仰しやいます。そ

して日頃はあんなに出不精の人でしたが兵隊さんのことになると一生懸命になり、肩に愛國婦人會の白バンドをかけなどしてお出掛けになります。今年は物資缺乏から儉約しなくてはとて、お正月の門松やお飾りをどうしようかといつて居られたが、いよいよよくなるご、兄さんの武運長久のためだとして例年よりもつと立派に大きい松を立て、お飾りも堂堂たるものをお作りになりました。元日お雑煮を祝ふ時、妹がうっかりして兄さんへ影膳を据えることを忘れ、お母さんに叱られ赤面しましたが、誰れよりも早く頓狂な聲を出して、「兄さん新年お目出度う」と嘯鳴つて、お母さんを笑はせました。

兄さん、お母さんの元氣たらないのですよ。毎朝女中たちより早

く起きて雨戸を開け、新聞の事變ニュースに目を通してから、そそくさご氏神様へ御参詣に出掛けられます。お歸りになつた時お聞きすると、自分よりもつと早く御参詣する人が澤山あつて、なかには戦死されたり傷付いたりしたお方のお母さんなども交つて居られるといつて、濟まぬ顔をして居られることもあります。私共子供達は、冬になるとお母さんがいつも風を引かれ、足が冷えるご仰しやるのを心配したものでしたが、兄さんの出征以來ごいふものは、風や冷い足などどこかへ吹き飛んで仕舞ひました。兄さん御安心下さい。ある日のこと、家へお出になつた人に御健康はごたづねられ、お母さんは「私は健康がごうのかうのご考へたごありません、この

事變下に何が贅澤だといつて、病氣すること以上のものはありますまい』なんて、ついにない氣焰をあげられたことがあります。それで兄さん、私も兄さんの御元氣はごうご尋ねしませんわ。日本の兵隊さんが風を引いて、アスピリンを呑んでゐるなんてごうしても考へられませんもの。

兄さん、あなたが召集を受けて野砲隊入りをしてから、滿一年になります。昨日は入營日ごあつて省線の各驛に紙や木綿の小旗が大袈裟な言ひようですが雲のやうに流れて、見送人の萬歳がごよめきました。私はお母さんの御用で銀座方面へ出掛け、東京驛で有樂町に乗りかへる時、十組もこの勇ましい風景を見ました。そして私も



見送り人に交つて、ハンケチを振り聲限り萬歳を唱へさせて貰ひました。歸りに電車のなかで、兄さんの一年前のことをもやもやと考へ込み、ついに三つ驛を乗りこして仕舞ひました。家へかへつてお母さんに、省線の驛驛で見たことをお話した所、お母さんは『皆様御苦勞様だわね』と仰しやつて、しばらくちつと下ばかり見詰めて居られました。私も自分の部居へ退いて、小半日も兄さんの入營前夜のことをさまざま考へてばかりゐました。

兄さん、あの晩、家は何といふごつた返へしてあつたでせう。私達女どもは、親類や知り合ひの人人が入替り立替り挨拶にお出になつたので、お茶の茶碗を出したり引込めたりするにほつほつとしまし

た。あの晩家に何といふ不安の空氣が渦巻いたでせう。私は兄さんが茶の間で、いろいろな戦勝のお札を丁寧にいただいておゐてになつたのを見た時、あなたが支那へ送られたならば、直ぐにも負傷したり殺されたりして返へされるに相違ないと思つて、身震ひしました。あの晩遅く、日本橋の小母さんが十三人から木綿を貰つて歩いて、出来上つたばかりの着物を持つて來て下さつた時など、私はどんなに有難く思つたでせう。お父さんが皆のものを六疊の居間へ集めてお話しになつた話を、兄さん覚えてゐらつしやるでせう、『家の歴史は祖父さんの代になるまで十二代の間、百姓をして來たものだが、先祖は信長の家臣で立派に日本歴史に名の出てる武士だった。

然し長い間平和の生活をして立身出世などを考へなかつたお蔭で、おれの代になつてその隠れた働きが報いられ、自分も何のなにがしと云はれるやうになつた。また今回は伴を軍にさし出し、聖戦に参加させるに至つたことも、御先祖さまの命令のやうな氣がする。』お父さんはかうお話になつてから、知人の息子さんが南京攻畧の際戦死されたが、父親は伴が卑怯な死にかたをしやしなかつたかご軍隊の報告を聞くまで、毎晩眠られなかつたといふ實話をお話しになりました。兄さん。あなたはお父さんのお話をどうお聞きになつて。若し兄さんが私を生意氣な女だと仰しやるならば、私あやまりますわ。私は兄さんが勇氣のある兵隊さんであることを、勿論疑ひませ

ん。

また私は兄さんの御入隊の日が、どんなに寒かつたかを忘れません。私のお友達は、兄さんが五尺七寸も背があるから、さだめし立派な野砲の砲手が出来上るだらうなどと、いつて羨しがつてゐました。然し、私共が兄さんを世田ヶ谷へ送り込み、随分と待たされて午後三時頃になり、就職の際作つたばかりのセビロを新聞紙に包んで片手にぶらさげ、軍服で出ておいでになつた時は、全くがっかりして仕舞ひましたわ。體に合ふやうな服がないので、ズボンがツンツルテンで三寸も短かつたのですもの。そしてズツクの靴が破れてゐたのですもの。その後私はお母さんに連れられ、隊であなたに



面會しましたが、寒い時のことごと、素手で厩を掃除したり、馬糞を片付けになつたため、手に痺が切れなどしてゐるのを見て、私はお氣の毒に思ひました。それでも三ヶ月の訓練は終り、毎日曜日に外出を許されて、立派な體格の兵隊さんと一緒に新宿などを歩いた時、私は本當に嬉しく覺えました。然し兄さんは星がたつた一つだつたので、手ばかり擧げておいてになつたのを不平にも思ひました。五月に入りいよいよ御出征になつた時、私共は御見送りをしましたが、あの時芝浦の混雜たらありませんでした。あなたごしみじみお話することも出来ませんでした。擧手の禮でにつこりお笑ひになつた時、私はお友達の申したやうに、まことに兄さんは颯爽たる

ものだと嬉しく思ひました。所でその後あなたがお送りになつた寫眞を拜見して、これが私の兄さんだらうかと疑ひました。願髻さへもぢやもぢや生やし、怖い顔して日本刀をついておいでになるので、お父さんは寫眞を眺めて「このぶんぢや、伴も一二年支那に居ると、關羽か鐘馗になつて仕舞ふだらう」と仰しやつてお笑ひになりました。ノモンハンの戦争記事が新聞に出始め、戦死者の名前のなかに野砲三聯隊のお方を見出しまして、兄さんの隊が分れて滿蒙國境の方へもお出になつたことを知りました。兄さんは筆不精だから何ともいつておいでにならないが、あなたのお友達がお父さんにお送りになつたお手紙のなかに、「毎晩大砲の音をききながら眠

についでゐる』とあつたさうで、お父さんは『倅の隊も討伐戦に忙がしいらしい』と仰しやつてゐました。そして『御先祖さまが守つて下さるから、戦争すること以外、何も考へる必要がない。ただ健康を持つて歸つて、立派にお母さんにお返しさへすればいい』と兄さんに云つてやると仰しやつてゐたから、あなたはたぶんそのお手紙をお受取りになつてゐるでせう。

私はお父さんに、今長い手紙を兄さんに書いてゐますから、何かお言附けてもと申上げた所、『わしはお前に自分の意志を密輸入して貰ふことはいやだ』と跳ねつけになりました。女の手紙はベタベタしたシュークリームのやうなもので、男の侃侃諤諤たる胡桃のやう

な言葉と一つにならないといふ御意見らしい。

それでは私のシュークリーム式手紙だけをお送りすることにいたします。兄さん、左様なら、

あなたの親愛なる妹より。

註、本稿は日支事變酣なる頃JOKの委囑により實際の経験を織込んで假空的に書いたもの、昭和十五年一月十三日夜活動女優山路ふみ子嬢同放送局より朗讀放送せり。

## 幻

新體制準備會終了の日記

日本人よ御身達の後ろに、大きな幻が立つてゐる、御身達の遠つ親だ！

振りかへり見よ、

御身達は靴の泥を拂ふに及ばない、着物の衣紋つくるに及ばない、大聲出すに及ばない、

黙して頷き認識すればよい、

幻もまた御身達に聲をかけない、ただ御身達を見守るだけだ。

御身達は今廣い廣い廢墟に立ち、泥濘と困惑のなかに入つてゆく

.....

幻は御身達を憐れと思ふ、だが御身達の勇氣を褒める、

憐れむは、御身達の運命を知るからだ、

褒めるのは、御身達が幽かな黎明の、廢墟の彼方に光るのを見るからだ。

氣を落付け、大膽であれ、

幻は御身達を守護して呉れる。

御身達の仕事は大きい、

朝日は上つて来る……新しい世紀の光りだ、突進せよ、幻を振りむ  
くに及ばない、御身達を守るのが幻の役だ。

朝日の登つて来る方角に進め、

靴が破れたら、跣足で往け、着物が邪魔なら捨てて仕舞へ、

裸になつて廢墟の高い丘に立ち、『われ日本人なり』と叫べ、叫べ！

幻は大聲だして、御身達の叫びに和するであらう。

幻は御身達を守つてゐる、

御身達はただ突進するのみだ。

進め、

進め！

### 龍に題す

二千六百年元旦の作

龍、龍、龍よ、

君は風雨を呼び、雷を従へ、

大空を往く時、自然の靈氣をあつめ、

縦横無盡に亂舞する。

君は千變萬化の踊り手だ、

動いて止まない魔物だ、

をして、われ等日本人は、

八絃の人生に、力の樂器を奏てる、

地上の龍だ、

虚偽、臆惻、奸智を蹴ちらし、

理想の十字路を走つて、將來に生きる。

君ごわれ等は、同じ力より生れ、

進化の攪法異つて、形を一にせざるのみ。

ああ誰か、われ等二つに、力の證跡を否定せんや。

龍となり日本人となる、これ一つの偶然、

流動の想像凝つて、異なる存在を得たるのみ。

日本人たるは、即ち龍たること、

空中の亂舞は、畢竟、地上の樂師を酔はしめるためだ。

昭和十四年元旦の言葉

空想の世界は消えたり、

今現実の海邊に立ち、

古き方則と制限を忘れ、

ただ力の渾身に漲るを覺える。

言葉あり、われにいふ、

「朝日を禮讚して、路なき天上を歩け。」

またいふ、

「將來に答へて、果てしなき人生の旅に上れ。」

神の建てたる一里塚を追ひ、

荒野にざくりと鋤を入れよ。

新しき人生を求めて、

希望の歡喜に生きよ。

ああ、瑣事を捨てて深きものに答へよ、

祈禱の魂に高き頂を極めよ。

われ等は神の莊嚴にまで  
のぼり、  
肢體を奔馬なりと感じ、  
拍車をかけて乗り廻はし、  
香しき元旦の空に、凱歌を響かせよ。

### 昭和十六年元旦の言葉

われ君にいふ所あり聞け、  
炭を失つて、君は太陽の恵みにかへれ、  
米を無くして、農民の辛苦を再認識せよ、  
砂糖を奪はれて、齒の保全を子女に期待せよ、  
天は徒に苦痛を與へるにあらず、君よわが言を聞け、  
鐵窓に坐せば、思想の時間與へらるるを感謝せよ、

敵に包まれて、君は渾身の力を丹田に集めざる可からず、  
よやかな言葉あり、七人の敵を得て眞男子なりと、  
今の貧しさに感謝して、明日の富來るを待てよ、  
持てるを失ふは、後に來るものもて満さんが爲めなり、  
われ君に酒杯をあげ、今の苦痛を祝はんとするなり、  
思ふに皇祖、苦痛なしに國を始め給ひしにあらじ、  
元旦に際し、今われ君にいふ……  
苦痛を與へられるこそ幸なれ、  
酒杯をあげ、萬歳を三唱して、  
須らくわれ等の力を計つてこれ男子なり、

萬歳、萬歳、萬歳！



二千六百〇二年元旦の言葉

卿等、古き凡てを解體し、

肇國の始めに復歸し、

以て皇運翼賛を新しくせよ。

ああ天壤無窮の眞理、

萬世一系の神勅、

炳乎として千載を貫く。

誰か日本の本津國たるを疑はんや、

誰か神機に抗するものあらんや。

我等今禊祓ひを行し、

神人合一の神秘に參せんぞす、

我等邪想の凡てを洗ひ清め、

國體扶翼の道に上らんぞす。

聞くならく、八百萬の神天安河原に集り給ひ、

眞理開顯を御議し給ひしと。

伊勢神宮五十鈴川の靈水永へに清く、

微風樹木を吹いて神意を傳ふ、

我等それを心解し、  
創造の覇業に就かざる可からず、  
ああ畏こき哉、尊い哉。

### 最後まで生きる

神の意志によつて生れたものだけが最後まで生きる。  
百萬の兵隊が戦場に消えてゆく、  
神はこれに責任を取り給はない。  
朝日は夜の褥をはね飛ばし、  
東の空を上つて来る、  
われ等は他の見ない崇高な光に包まれる、

金色の火花のやうな光に包まれる。

神が自らの意志で生み給ふた人間に與へられる特權だ、感謝せよ、感謝せよ、感謝せよ。

われ等は純潔と節操を知らない國を罵らない、

天の使命なくして生れた人間を救はんごしない、

彼等に永劫の音律を語らうごしない、勿論だ。

われ等は神の意志によつて、生れたことを感謝しなければならない。

生命の重大なることを信じなければならない。

神は創造の意義を極めよと云ひ給ふ、

人生存在の理由を明かにせよと云ひ給ふ、

われ等は苦惱の聲をあげて神に答へ、  
前進の歌をうたつて報いねばならない。

汪兆銘に與ふ

雲破れたり、陰鬱後退し、  
空を青緑に委ね始めたり、  
時は更生の秋なり。  
荒涼たる灰燼の廢墟地を蔽へど、  
羽搏き始める一羽の鳥あり、  
首を擡げ、

あたりを見廻はし、  
(ああ何たる逞しく雄雄しき姿よ！)  
清新の一聲高く、天に沖し、  
その歌ふらく……  
『生臭き血潮、徒に流るるを止めよ、  
神は人間を死の生贄として作れるにあらじ。  
ああ愛の隠れてより何んぞ長き、  
平和没してより何んぞ長き、  
されど審判の日來りて、  
新しき世界再び起ち上らんとするなり。』

皆のもの、平和と愛の歌に和せよ答へよ、  
希望の喇叭に勇み立ち、  
誇りの生活を設計せよ。  
喜べよ、隣人愛ここに甦れり、  
憎悪、恐怖、策略さては弾丸、戦車の軋り、  
退け、退け、それ等を過去たらしめよ。  
天に甘き日光を溢れしめ、  
地に平和の歌を奏てしめよ、  
東亞の大陸、東縛の鎖を破れり。  
廢墟の主權を秋蟲より奪ひ、

生命の種子を灰燼に落とし、  
來らん春の榮えを期せよ、  
ああ人生を火の如く登らしめよ！』  
懐しき友よ、われ等君を待つや久し、  
君今遂に來れり。  
君の提げる燈火は豪味を照らし、  
君に明哲の姿あり。  
われ等君と共に、希望の探求に上るべし、  
最後を約束する冒險の聖途に上るべし。

君は智者だ……君は想像を實在化せんごすればなり、  
君は勇者だ……君の眼は將來にあればなり。  
君は氣高き風貌と理想に向け、  
よろめく同胞に道を切り開き、  
君は倒れたる圓柱をささへ、  
君は落ちし石をもごへ返さんごす。  
君はわれ等ご共に、天の使命ご信じ、  
壯大なる夢に酔ひ、  
道を星より星へご求めんごす。  
ああ廢墟より生れる新しき世界よ、

血潮に清められたる愛と平和の世界よ、  
東亞の民、皆のもの、希望の歌に目覺め、  
神に感謝して、生命の種子一つ一つを地中に落ごせ、  
餘は大自然の恵みに託して可なり。

註、本詩は昭和十四年九月二十二日、南京政府設立に際し作れる  
もの。

## 翼賛の詩

新體制を設計するもの、

違つた角度から圖を組立てる……

凡ての同胞を體の器官と筋肉の如くあらしめよ、

私共は手だ、足だ、指先だ、

彼等の運動は關節を通じて私共まで延びねばならない、

私共は笛を吹く、太鼓をたたく、

彼等は返事を繰返し折返すであらう、  
體操だ、一二三の體操だ。

謙虛の態度、小さい弱いものに對する理解、

如何なるものも輕蔑しない宏量、

民衆の内奥に入つて愛の實驗を植ゑる、

純情ですべてに馴染み、

嫌な顔せず互に生活の感激を分かち合ふ。

自らの知識を忘れねばならない、

地位階級財産、これが何であらう、

一億一心の平等觀、魂の地均しだ地均しだ、  
 鋤を持って、鋤を持って、一齊に一二三。

一つの目的と一つの方法、

互に摸倣し合つて自分の心を作ることだ、

そして摸倣から出來た心を愛することだ、

潑刺として正しい氣持ちで愛することだ、

勿體ぶらず有りのままの人間として相互の翼賛、

誰がこれは平凡だ、俗だ、内容貧弱だと非難する。

無邪氣と忍耐、一糸亂れざる正義、

個的道德を國是にまで高め、

私生活を國策の實踐へ延長させる、

私共は運動の摸倣から誠實を學び、

正しい習慣と善良な愛情から、

新らしい建設へと移つてゆく。

私共は凡てと共に、小さい存在として満足せねばならない、

古い英雄觀の破壊、

いな、お互に英雄になることだ。



## 覺悟

見よ、空は晴れたり、  
萬物その姿を明かにし、  
闇の靄去つて跡なく、  
三つの旗颯爽と風になびき、  
部署を守つて翩翩たり。  
覺悟、決意、

一糸亂れざる設計……

我等新世紀の光りを追ひ、  
創造の方途を遠きに求めんとす。

我等英米に云へり、……

新しきもの古きに替る、  
慨歎するを止めよ、狼狽する勿れ、  
今彼等を顧みる涙なし、  
傷けよ、倒れよ、死せよ、  
歴史は新しき頁を書かざる可からず。

大義名分既に決したり、  
矢弦を離る、誰か呼びかへし得んや、  
太陽東を離る、誰か呼びかへし得んや。  
我等わが道を往く、往かしめよ。

ああ出征の諸勇士、われは知る、  
卿等の魂は體を焼けり、  
何たる感激、何たる叫聲、  
稻妻となつて空を裂き、  
雷鳴となつて戰場を支配し、

東亞創造の先陣を承る、  
我等卿等と共にあり、  
卿等につづいて往く……  
進軍、進軍、進軍！  
卿等靈感となつて、我等に點火す、  
我等ために飛躍す……飛躍、飛躍！  
卿等なくして何處に我等の飛躍あらんや、  
我等擧つて、一億一心、  
今新しき人生の任務につけり、  
我等卿等と共にあり、

卿等につづいて征く……  
進軍、進軍、進軍！

### 三國同盟成る

鼎は三つの足をふんばる、  
世界地圖の上にとつかまゑ坐る、  
その力を丹田に集める、……  
何物もわれらを軽んじ、  
われらを動かす能はじ。  
見よ鼎より雲たちのぼる、

天に創造の世界を求め、  
地に平和の慈雨あらしめるために。  
歡呼の聲をあげよ、三國同盟なる！  
期待はつひに現實化せり、  
再び歡呼の聲をあげよ！  
新しき歴史ここに始まる、  
因襲と不當の富に自己を偽るもの、  
朝日を否定して惰眠を貪るもの、  
われ卿等に告げん、  
『舊時代の血汐は枯れたり、

空しき人間の誇りを捨てよ、  
持つ可からざるものの重荷より身を軽くせよ、  
われらは卿等を葬むるにあらず、  
卿等が新しき時代の感覺に目覺め、  
眞實の叡智を取りかへし、  
共存共榮の一義に生きんを勸告するのみ、  
われらは卿等を死の布で包むにあらず、  
ただ赤裸となつて再生するを欲するのみ。』  
三國同盟なる、三度歡呼の聲をあげよ、  
志を同くし苦惱に身を洗へるもの、

今一つになつて新體制を叫ぶ、  
耳あるものは聞け、  
富と策略と浪費して、  
自己を守るに急なるもの、  
卿等は神の筈を待つあるのみ。

### 米國人に與ふ

君の議論は横車だ、身勝手だ……  
僕は青春と理想の横暴を問はない、  
君は世界を教へんとする……出来れば結構だ、  
要するに君は、感情の冒険者たるに過ぎない、  
自分が喜劇役者たることを知らない。  
君は物的資産の大を誇り過ぎる、

徒に夢を空に登らせようとする……これもよからう、

だが君は、机上の傳奇作者たるを知らない、

君は言葉の浪費者だ、

喫煙室の辯士だ。

僕は君に失望しない、それで君にいふ、

君が僕と共に、本當に世界の將來を思ふならば、

反抗と懷疑を捨てねばならない、

獵奇を忘れて、言葉の無益を知らねばならない、

君の眼が開いて現實を見るならば、

僕の腰に、兩斷の利劍が煌くを知るであらう、

驚いていけない、殺人劍でなく活人劍だ、

この時君が僕に手をさし延ばせば、

僕は君の友たり得るを知つてゐる。

註、本詩集に直接米國人に關するもの三篇あるが この作は最初  
のもの週刊朝日昭和十六年三月二日號所載。

## 暴風雨

外は吹きまぐる恐ろしい嵐、  
ひゆうひゆう風は唸る、  
雨は車軸を流して海を作る、  
星は姿を消して咫尺を辨じない。  
誰かがわが戸を叩いてゐる……  
病に倒れたものか、

戦ひに敗れたものか、  
わが家に隠れ家を求めんとするらしい。  
私は戸を開けない……  
無慈悲だと思つて呉れるな、  
私は外の嵐に突進して、  
暗黒を制しようとしてゐる、  
老ひた身の白髪を染めようとしてゐる。  
まだ誰かが戸を叩いてゐる……  
叩くに及ばない、入りたければ強く押せ、  
遠慮は無用だ、入つて来い、

だがお前の求める隠れ家でない、  
内へ入つても、外の嵐を避けることが出来ない。  
またしても誰かがごんごん叩いてゐる……  
憐れなものはお前だけでない、  
私もお前と同じだ、  
どうせ暴風雨に入つて生死を決するの外はない、  
叩くのはよせ、私の出るのを待て、  
一緒になつて暗黒のなかを歩き廻り、  
進めの歌を高らかに叫んで、  
光りの道を求めよう。

## 人生甦る

波濤は高し、風吹きすさむ、  
汽笛耳を劈く、叫ぶ、  
「人生の斷末魔だ、  
海に溺れて再び生きるこゝとなし！」  
私共は答ふ、  
「恐怖、身震ひ、わが所有にあらず、



暴風雨に面を曝らし、

止むなくば、人生の最後を見届けるであらう。」

しばし時経て私共は再び言葉を續ける、

『底なき海より人生の新しき歌高まり來る、

われ等人生の榮えを見るであらう……静かなるは歡喜に溢れるか  
らだ、

苦惱に清められ、血に洗はれて人生始めて甦る、

ああ來り飛べよ、新しき生活！

廣漠たる空の下、人生の聖歌を遙けき波路に響かせよ、

空想を深き底に葬れよ、

賤しき感情の屍を暴風雨の胸に眠らせよ。」

## 倫敦炎上

私は庭にすだく虫の音を聞いてゐる、

古い昔倫敦で、これを聞き、自然の聲はいつも一つだと感じた、

歲月流れて四十年になるが、今なほ倫敦の虫は、同じ聲で鳴いてゐ

るだらうか？

鳴いてるだらう……炸裂する爆弾を餘所に、

我關せずコロコロと、

あるはまた、傷つき倒れた人間の着物の下で。

私は今、連夜の空襲を想像する……おお、物凄い倫敦炎上、

雨ごふる油入焼夷弾、恐ろしい時計仕掛爆弾、

天地も裂けよごばかりの強爆發性爆弾、

何たる生活機能の破壊よ、

何たる戦闘力の脅迫よ、轟進よ！

おお、青赤黄の稻妻が亂舞する、

天は八裂けになりて火の海になる！

地上の闇黒をかけ廻る消防隊、

警護團、あるは警察吏、

市民は防空の洞穴に潜り込み、

耳を抑へ、目をつぶり、

急に思ひ出した神様へ祈禱する、

彼等は従來の誇りを捨てた穴居人だ、

彼等は世界支配者たりし夢の精算を強ひられた敗北者だ、

私は今庭の虫を聞き乍ら、この光景を想像して悲痛に打たれてゐる。

昔ネロは妻を殺した、都會を焼いた、

秦の始皇帝は學者無數を穴埋めにした、

その時私のやうに悲痛を抱いて、秋虫を聞いた詩人がゐたであらうか？

彼等も新秩序を夢みる當然の行爲であつたかは知れないが、

今日ではその暴威と無慈悲だけが人に記憶されてゐる、

そしてヒトラーも千年後には、倫敦を焼いたことだけしか残らない

かも知れない。

おお、悠悠たる自然よ、

變轉定らない人生よ！

人間は今日處理だけすればよろしいか？

曰くよろし、

私共は現實に生きるもの、

明日のことなど、神様か犬か猿に、食はせておけ！

## 飛躍

私共は自然を愛し過ぎた、  
無批判だった、木に鳴く蟬が國の運命に關はるごさへ思つた。  
私共は幸福を疑はなかつた、  
迷信に縛られ、餘りに神龕の平和を貪りすぎた。  
時が來た、自然をしばし忘れねばならない、  
足を地上から離さねばならない、

自分の幸福を再検討しなければならぬ、  
飛ぶことを學ばねばならない。

私は君ひとりに語つてゐない。  
國家に對して同じく語つてゐる。  
數千年の歴史を一先づ書庫に入れ、  
生れたままの状態に再出發がなければならぬ。  
赤坊も母の胸にのみ横たはらなかつたならば、鳥のやうに飛べたて  
あらう、  
鹿のやうに走れたてあらう。

國家は大陸を論じ、南進を唱へ、  
人民に故國を離れよといつてゐる、  
ああ、飛ぶことを學ばねばならない。  
飛べ、飛べ、大空かけて飛べ、  
君もし大空に敗北を見たならば、  
須らくこの壯嚴な敗北に感謝し、  
鷺のやうに地上に歸つて來い。

私共の祖先は遠い所から飛んで來た、  
皇孫瓊杵尊は大八嶋へ飛び下り給ふた。

牛若丸は天狗から空飛ぶ術を習つた。  
飛ぶものに渾身の呼吸、體の重心一つに集る、  
精神の統一、物に對する靈の支配、  
私を見る、飛ぶものに渴望の表徴、  
感謝の叫びと炎の表現、  
詩がある、創造がある、  
無駄騒ぎを静まらせる靈感の命令。

海に呼ばれて

一、纜解かれ、

舟板引かる、

船は出でたり、

快樂蹴ちらせ、

國に殉ずる、

勇氣は一つ、

ああ我等、我等海の子、波の友。

二、後へは退かじ、

進めの聖歌、

理想の行手、

路遠けくも、

波間に認む、

一つの光、

ああ我等、海に呼ばれて、千里往く。

海に呼ばれて

三、幸先祝ふ、

鳥船めぐる、

越せよ暴波、

恐るな疾風、

どこで死ぬとも、

二度とは死なじ、

ああ我等、波や我等の、覇氣を知る。

四、われ等知らない、

祈禱の言葉、

神が自分よ、

自分が神よ、

祈れよあらば、

わが身を拜がめ、

ああ我等、道は一筋、海の上。

註、本歌詞はJ O A Kの委囑により作られたもの。

海に呼ばれて

## 南進國是

一、重さなる山の、朝露、  
若き血汐を、天に寄す、  
地に常夏の、花亂れ、  
雲と煙れる、榕樹には、  
生生多産の、誇りあり。

二、見よ洋上の、金字塔、  
美なり壯なり、臺灣や、  
築くわれ等が、南進の、  
前衛ここに、動うごぎなく、  
力確保の、無敵軍。

三、呼べば答へる、大屯の、  
峰鐵壁の、陣を張る、  
盡さぬ流の、淡水河、  
劍洗ふに、水清し。



四、ああ若人よ、小勇士、  
 智識を磨き、膽を鍊り、  
 天の使命に、覺悟せよ、  
 明日の光榮、君を待つ、  
 明日の光榮、君を待つ。

註、本歌詞は臺北某學校の委囑により校歌として作れるもの。榕樹はバンヤンの木、枝垂れ地中に入つて根を持ち漸次に一本の木となり繁茂し行く。南洋から印度にかけてこの樹多し。大屯山は臺灣の火山。淡水河は臺北を流れる。

南

南へ、  
 南へ、  
 熱帯の世界卿等と呼ぶ、  
 炎となり、  
 感激となり、  
 絶叫となり、

南へ

南の空へ、

消えない衝動の一文字を引け、

光となつて、

運動の力を放射せよ、

知識の表象となつて、

未開の靈地へ突入せよ。

恐ろしく大きい密林は雲の如くに煙る、

木の間漏る強烈の日光は氣體でなく、

靈に等しい實在だ、

その腕を扼し、その唇に觸れよ……

抱きしめる腕だ、情熱の唇だ、

卿等は重い體力を背負ひ、

不釣合の恰好でもいい、

充分の呼吸を吸つて、飛躍の用意せよ、

虎の如くに歩まねばならない。

鳥の翼が空氣と一つになる如く、

卿等は筋肉と神経の凡てを、

運動の一つに約束させよ、

卿等の體は歡喜の機關となつて、

南の世界を歩き廻はり、  
宇宙に響くシンバルを奏てよ。

ああ、熱帯の世界卿等と呼ぶ、

南へ、

南へ、

鳥となつて體を支配し、

魂の光となつて

飛べ、南へ、南へ。

### 興亞行進曲

一、天にきらめく、神神の、

指揮に従ふ、總和樂、

たたへよ唄へ、八絃の、

心一つなる、大理想、

ああ知れ君よ、天地の、

平和確保の、興亞陣、

われ等は叫ぶ、民族の、  
維新を誓ふ、行進歌。

二、力よ智恵よ、想像の、  
築く東亞の、新秩序、  
唄へたたへよ、建設の、  
運命擔ふ、決死隊、  
ああ知れ君よ、翼賛の、  
天業高し、大征途、  
われ等は叫ぶ、民族の、

共榮期する、無私協和。

三、建てん犠牲の、金字塔、  
子孫にのこす、天の意志、  
たたへよ唄へ、人生の、  
勇者の生きる、大使命、  
ああ知れ君よ、皇道の、  
烽火ぞあがる、新世紀、  
われ等は叫ぶ、民族の、  
血もてつながら、全東亞……

心揺かぬ、團結の、  
燃ゆる炎の、進軍だ、  
力だ意志だ、情熱だ、  
ああ往け友よ、民族の、  
最後の勝利、君を呼ぶ、  
永劫の壯圖に、天答ふ。

註、本曲は前掲『全亞細亞民族に叫ぶ』を七五調に書きあらためたもの。

### 興亞奉公の歌

- 一、天に二つの、太陽は照らず、  
理想の道は、一つなり、  
築け東亞の、新天地、  
勇者の歴史、君を待つ。
- 二、急げわが友、道遠し、

されど朝日の、一つ道、  
暗き荆棘を、きり開き、  
据えよ文化の、支柱石。

三、神の與へし、進軍譜、  
われ奉公の、腕ふこし、  
新しき世の、烽火とて、  
身を焼く靈火、空を往く。

四、斷の一字を、肩にかけ、

腰に聲あり、破邪の劍、  
ああ聞け若人、君を呼ぶ、  
興亞の喇叭、音たかし。

註、本歌詞は内閣の命にて興亞奉公日撰定せられたるに際し、日  
本放送協會の委嘱を受けて作れるもの、作曲者信時潔氏。

紫色旗の下に

一、深き谷間の、岩清水、  
海を稱へる、叫びあり、  
若き學徒の、姿見て、  
知るや未來の、眞男兒。

二、菊の徽章に、身を守り、

高き理想に、鋤を入れ、  
誠を語る、紫色旗に、  
新しき世を、組立てん。

三、怯懦は犬に、食はせよ、  
優柔不斷、猿にやれ、  
われ等は生きる、死の正義、  
朝日の意氣や、天をつく。

四、ああ前進の、命下る、

往け奉公の、滅私軍、  
生命ささげて、神明の、  
加護に答へん、答ふべし。

註、本歌詞は東京市立某中學校の校歌として作れるもの。學生菊の徽章をつけ校旗紫色なり。

### 壽く言葉

燦たる紫宸殿の御儀は申すも畏し、  
傳統を語る衣冠束帶、地上に虹を描く十二二重、  
自然の音律凝つて嚙喰たる音楽となる。  
世界何處にか、かかる藝術美に即位し給ふ天皇あらんや……  
起つて即位を宣し給ふ時、われ想像するに、  
山嶽は背のびし、溪水は歩みを止め、草花は面を新にし、



萬歳の聲に宇宙一新の實を顯はすならん。  
 なほ、天皇はここに新しき世界を創始し給ふ、  
 われ等平伏し、新しき人生の門に入るを誓ふべきなり。  
 思ふにわが祖先は大地の愛に生きたる農民なりき、  
 力強き拳と粗き木目の皮膚を、鋤と鎌との間に正直を拾ひたる生活  
 を想像せよ。

天皇大嘗祭の御儀に豊饒なる秋を、  
 わが日本の諸神に感謝し給ふ時、  
 われ等は平和の民、大地の愛人たるを誓はざる可からず。  
 わが天皇は劔の勇者として即位し給はず、

神への感謝を以て御代を始め給ふこと、あゝ實に尊し實に尊し。

註、本詩は昭和三年十一月十日帝都某紙所載。祝天皇陛下御即位  
 の大儀に際し歌へるもの。

國土禮讚の歌

一、あま美なるかな、東海の、  
精氣集まる、日の本や、  
山は八千代の、緑色、  
川には映る、四季の景、  
實に歌の國、神の國。

二、春は櫻よ、秋紅葉、  
夏の河邊に、星や降る、  
冬白雪は、世を清め、  
天地維新の、示しあり、  
褒めよ稱へよ、わが國土。

三、上一人を、掟とし、  
見あげる空の、太陽の恵、  
ああ誠なき、世なりとて、  
誰か亂さん、天の道、

あれ等は守る、臣の徳。

四、見よ雲を抜く、富士の峰、

神の宮居と伏し仰き、

登る理想の、九折坂、

勇むわが身の、馬に御し、

若き血潮に、鞭をあつ。

五、ああ國多く、盛衰を、

水に書けるも、日の本や、

國する二千、六百年、

永劫に榮える、その生命、

宇宙と共に、極みなし。

註、本篇は皇紀二千六百年記念のため作れるもの。英語に移植され  
れ廣く世界に散布せられたり。

禮 讚

友よ、孤獨の塔を捨てよ、  
明けゆく空の指揮を受けよ、  
ああ、心一つなる管絃樂、  
朗朗たる歡喜を生命に叫ばせよ、  
人生必然の究極を歌へ……  
われを生める故國への感謝、

われをはぐくめる山川への讚歌、  
揃つて歌ふ最高の諧調よ、  
星も月も太陽も集つて歌ふ、  
草木百花共にこれに和する、  
友よ、君のみ孤獨たる能はじ。  
遠つ親の二柱、海中に杖を入れ、  
わが國土を造り給へり、  
目途なくして顯はれしにあらず、  
誰か偶然の所産なりといふ……

われ等課せられたる責任を果さざる可からず、  
懐疑、迷信、躊躇の凡てを捨て、

國土禮讚の一途にのぼれ、  
聲を揃へて、建國の理想に答へざる可らず。

ああ、生生多産の眞理、

天壤無窮の御恵み、

われ等祖神に思ひを寄せ、

空間と時を超絶せよ、

われ等この時始めて知る……遠つ神の働き、  
限りなき才能、更に限りなき想像、

ああ、限りなき力、  
常に新らしく常に喜ばしき人生の活劇、  
われ等身の犠牲により國土の肥料となる時、  
人生は合奏の高潮に達し、  
天地人の融合ここに全きを知る。

一億一心

一、神と君との、道直ぐに、  
歴史や古し、呼びかへせ、  
君民一如、たうたらり、  
心無にする、一億の、  
互に結ぶ、鐵の紐。

二、己が體に、鞭をあて、  
拍車を入れよ、驅りたてば、  
心に野獸、潜むなし、  
穢れなき身の、たうたらり、  
たうたらたらり、滅私國。

三、生きよ運命の、示すあり、  
守れ一億、一心の、  
體制清し、たうたらり、  
天高くして、意氣沸る、

歌へ東亞の、大使命。

四、ああ北方の、鷺の群れ、

あるは西より、雲あらし、

襲ひ來るも、護國陣、

守りゆるがじ、たうたらり、

たうたうたらり、神の國。

註、本歌詞はJ O A Kの委囑により作れるもの。「たうたうたらり」は謡曲翁のなかにある言葉。

### 年頭伊勢の大神に額づき申す

徳六合を統べ給ひ、

智萬世を貫き、

道八紘を宇とし給ふ。

歴代の天子、かしこみ、この遺訓を奉じ、

國土や天壤無窮、いや榮えに榮ふ。

五穀豊饒、無盡なり山海の獲物、

年頭伊勢の大神に額づき申す

民度を守り黙黙として働く、  
言擧げせぬ美風、尊いかな！  
あやに畏き日本國、  
民大神にまつろひ奉り、  
安けく智恵ある生活を営み來れり。  
げに隨神の行の國、  
謙讓、他を輕んずるなく、  
峻嚴身を責むるに急なり。  
さるに空論と恫喝に耽る國あり、  
暴戾を恣に言擧げし來り、

わが神ながらの行を否定し、  
國土の定泰を脅せり、  
隱忍自重つひに切斷され、  
今や聖戦を起して敵を撃たんとす。  
見よ、神鷄既に空を飛び、  
その導く所鱗鱗波を蹴り、  
海上燦然たる旭旗翻ざるなし。  
われ年頭に際し國祖大神に膝まづく、  
冀くはわが祈願を受け給へ、われに神護を垂れ給へ！  
われ等一億一心、大神の神意を奉じ、



國體を安んじ更に全亞の共榮を築かんことす、  
ああ大神よ、冀くは神力を與へ給へ！

## 四月の頌

温い日光の放射に愛撫を感じよ、  
皮膚は冬の嚴肅より放たれ、  
血は寒氣を忘れてなみなみと流れる。  
ああ、四月の雨は、  
しとしと打つて復活の歌をかなてる、  
菜種や蒲公英は黄色一つに地上を塗りつぶし、

この世の春も今だ。

自然は純でしかも繊細な感情で包まれ、

知的で肉感的な膚さはり、

内部より洩れる眞珠の微光。

わが四月は光線と反射の亂舞所、

この親密な交換は畫家のパレットだ、

すべてが妖精のやうに微笑み、

恰好のいい足をあげて踊る。

その運動は幾何學的な音律に正しく、

その流目に何たる明るい魅力があるだらう。

庭の櫂は麒麟のやうに首をのぼし、

伽羅は青黒く着物を染めあげ、

木瓜も海棠もチュウリップも山海の珍味を地上に並べる。

## 美の新形態

お前は手の平で私の目を蔽った、  
そしてそれを取りのけ、私の眼を新しい世界へ開かせた。  
お前の手に流れた愛の温か味が、私の神経に染み渡る、  
手や足の先きより眼前の自然へと进り込み、  
ああ、自然は姿を一変した。  
木も花も踊つて新しい形態を作り、

鳥も唄つて、原始美への復活を稱へた。  
私は逃遁の世界への慾望を忘れ、  
問題は美の探求にあらねばならぬと思つた。  
その時、お前は私に寄り添つて草原に坐り、  
燃えるやうなバターカップを指先でいぢり乍ら、  
大きな驚きの口を開いて、私に叫んだ、  
『どうしてこんなに黒い無感覺の地面に、美の血汐が流れるでせう！』  
ああ、これは四十年前も前の昔話だ。  
だが今でもお前が、幻の手の平を私の目から取りのけて呉れると、  
その瞬間に、私の眼は新しい世界へ目覚めるやうに覺える。

自然が脱皮して美の新形態を作る、  
木も花も鳥も踊る……  
どうして私が踊らずに居られよう！

### 棒 高 飛

自然の棒高飛は素晴らしい、  
その最後を御覽なさい、  
手に持った棒を見事に捨てて仕舞ふ。  
棒は潔くばらりと花の棒を捨てる、  
秋の地上に黄金の葉を撒きちらす公孫樹は、  
ああ、何と立派な棒高飛だらう。